

2005年10月17日

## ディケンズ・フェロウシップ日本支部 ニューズレター

2005年度総会は10月8日(土) 甲南大学で開催された。参加者は60名、会場前のピロティーには恒例のように“Dickens's Childhood Reading”の展示がなされ、*Cries of London*, *Broad Grins*, *The Tales of the Genii*, *The Humourist's Miscellany*, *Little Goody Two Shoes*, Lane 訳の *Arabian Nights' Entertainments* など、19世紀はじめの珍しい児童本がたくさん展示された。

支部長の任期は本日の総会をもって終わる。開会挨拶では、支部のお世話を6年間あまりできたことを喜びとともに、ディケンズ研究の面白さ、とりわけ生きている間は世間の耳目を集めるベストセラー作家、亡くなったときは『タイムズ』紙をはじめ新聞雑誌が口をそろえて国民的損失であると述べて愛惜する作家の、かすかすの魅力と、あり余る才能と、そして演劇興行や雑誌編集など多くの活動を研究できる喜びを語り、支部のいっそうの発展を祈った。新支部長には原英一氏が選ばれ、支部チャーター引継ぎの後、instructive でありかつ楽しい支部にしたいとの挨拶があった。

以下、総会の審議事項と研究発表・講演内容について報告いたします。

### 総会

青木副支部長の司会のもとに西條支部長が議長をつとめ、議事が進められた。

#### 1 総会議事

##### (1) 役員改選

「支部規定」第8条に従い、次の役員が選出された(敬称略)。

支部長	原 英一
副支部長	佐々木徹
名誉支部長	宮崎孝一、小池 滋
監事	植木研介
理事	中村 隆 (財務担当)
理事	松岡光治 (Net 担当)
理事	要田圭治
理事	金山亮太
理事	玉井史絵
理事	新野 緑
理事	廣野由美子
理事	松村豊子
理事	村山敏勝
理事	山本史郎

【以上可決】

##### (2) 2005年度会計報告・監査報告

別紙のとおり田中財務理事による会計報告および松村監事による監査報告があり、2005年度決算は満場一致で可決された。 【可決】

引き続き、2006年度の年会費については本年度と同じ6,000円に据え置くことが提案され、了承された。 【報告了承】

##### (3) 諸報告

- a. 来年度の春季大会は6月10日(土)、山口大学にて開催。
- b. 総会については、追って連絡いたします。

#### 2 研究発表 (14:45-15:20)

中村隆氏(山形大学)の司会の下に、次の研究発表が行われた。

- (1) 吉田朱美氏(北里大学)「John Jasper はなぜ不幸なのか? *The Mystery of Edwin Drood* における倦怠感」
- (2) 吉田一穂氏(甲南大学)「*Great Expectations* 作品のテーマと'self-help' のコンテクスト」

### 3 講演 (15:30-16:20)

山本史郎氏（東京大学）の司会の下に金山亮太氏（新潟大学）は「左側に転覆する列車 デイケンズと脳梗塞について」と題して、デイケンズの脳出血による死亡は1865年のステイブルハーストでの鉄道事故と関係があることを医学雑誌「ランセット」の記事によって跡づけた。事故での損傷部位が言語野のある左脳ではなく、直感、想像力、感情をつかさどる右脳であったことが、最晩年には創作よりも朗読活動へとむかったことと関係があるのではないかという解釈は興味深かった。

### 4 特別講演 (16:50-18:15)

佐々木徹氏（京都大学）の司会で、スレイター教授は“Dickens's Lives”と題してフォースターからアクロイドに至るまでのデイケンズ伝を通観し、時代とともに変わるデイケンズ像について考察した。特に、*Daily Mail* に連載された *The Life of Our Lord* が聖人としてのデイケンズを強調していた時に、ライバル紙の *Daily Express* がエレン・ターナンとのスキャンダルを暴露したトマス・ライトによる記事を掲載したという出来事が端的に示すように、1930年代はデイケンズ像の大きな転換期であったことが明瞭に示された。

### 5 懇親会 (18:20-21:00)

豪華な料理とワイン・日本酒がふんだんに並ぶなかで40名の会員が、新支部長の乾杯の音頭のもとに、楽しい語らいと交歓の場を繰り広げた。懇親会もたけなわになったころ、いわゆるアフター・ディナー・スピーチがおこなわれ、伊藤廣里氏、Jenny Holt-田口氏、鶴飼信光氏、マイケル・スレイター氏、松村昌家氏より、デイケンズへの関心、思い入れ、そして数々の楽しいエピソードが披露された。

## お知らせ

1. 支部事務局の引継ぎは、新・旧支部長および財務理事の間ですべて終了し、ロンドン本部へも総会内容を報告しました。次号の *Dickensian* より、新支部長名が掲載される予定です。
2. 2006年度(2005.10~2006.9)の年会費6,000円を同封の振込用紙にて12月末日までにお支払い下さい(郵便振替の住所はすでに東北大学に変更済です)。
3. 今年度の『年報』作成には宮丸裕二氏が、Virtual Conference 作成には梶山秀雄氏が担当理事を補佐して作業をすすめて下さいました。今後しばらく上記作業を継続的にお願いしたいと思いますので、適当な担当名をつけて両氏を「会員名簿」の理事の下に掲載いたしたく思っています。よろしくご了承下さい。
4. Dickens Fellowship International Conference の予定。

2006	Amsterdam	July 27-31
2007	Philadelphia	July 19-24
2008	Durham	July 23-28
5. 『年報』28号の発送をもって2005年度事務のすべてが終わりました。6年余りの間、皆様より暖かいご協力、ご支援をいただき有難うございました。今後とも支部のいっそうの発展のため、よろしくご協力のほどをお願い申し上げます。なお、原英一新支部長のあいさつの一部を掲載させていただきます。

「振り回された大学改革の行き着いたところは、人文学の軽視、とりわけ文学研究への蔑視となったが、われわれがデイケンズから与えられ受け継いだものが、間違いなく实用主義・拝金主義の荒野の上にクイーン・マブの馬車となって高らかに飛翔することを信じたい。

日本支部の会員は大部分が研究者であるとはいえ、フェロウシップの精神は、他の学会には類例のない相互信頼と協力関係を醸成してきた。デイケンズを愛する者同志のきずなをさらに深めることに、そして若い世代にヒューマンイズムの価値を伝えていくことに微力を尽くしつつ、会員諸兄姉と共に歩んでいきたいと思う。」

敬具